Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫茂美

2022 年度開講特集

現代写真研究所

〒 160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 ｻﾜﾉﾎﾞﾘﾋﾞﾙ 5.6F

03-3359-7611（TEL）03-3355-1462（Fax）

http://www.genken.ac

jimukyoku@genken.ac

責任編集　金瀬 胖

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。

船橋・缶コーヒーのおじさん　２０１７

2022 年度開講にあたって　教務主任・金瀬胖

詩人の長田弘は書いています。「豊かな社会、文明技術がわたしたちにもたらしたのは、「独りでいる」というあり方です。わたしたちの社会は、「独りでいる」というあり方をどんどん日常につくりだしてきた社会です。一緒にそこにいても、「独りでいる」。高齢化。少子化。引きこもり、オタク。ホームレス。独身。離別。いずれも「独りでいる」社会の表情です。「なじみ」「いつもの」がなくなった街。言葉が人と人を繋がなくなっている例が、コンビニやファストフードをはじめとする店のあり方。 そして、メールやネットがもたらしたのは、独白のコミュニケーションです」。上のスナップ写真のことを書いてる感じもします。

「言葉が人と人を繋がなくなっている」、とは大変なことです。言葉が繋がらないとき暴力や戦争がうまれます。それは世界で起きていることです。「写真もあなたの言葉です」は、報道写真が写真界を席巻していた 1970 年代の現研創立の言葉で、写真で伝える、ペンだけでなく写真を、という意気込みがあります。いま、写真は生活と社会の中にあり、いわば啓蒙的な文化というより、生活文化そのものになっています。写真を欲望と消費の具にしてしまう。そういう「文化」の仕掛けの浸透でもある。この 20 年ほどの間の大きな変化です。一方、言葉のほうは貧困になり、独白やメディアや官僚の造語、バカ丁寧な言葉、紋切りの言葉が溢れます。身内だけに通じる言葉、他者とは通じない言葉の社会です。そしていま写真と文化に関わろうとする人の活動がとても重要になっているように思います。

現研のもう一つの問いかけは「写真に何ができるか」。それは、一人の人間としてできることをきちんとやっているか、という問いです。それは何をしないか、という倫理的な問いも含んでいます。消費文化の奴隷にならないこと、文化の創造者として、ゆたかな写真生活の築いてほしいのです。

CONTENTS

特別賞　平山謙
奨励賞　豊島洋
奨励賞　稲垣直子
奨励賞　舘山哲
奨励賞　清水康子
宮原咸太郎
谷口亙
生田一美
髙松安子
長谷川啓一
渡辺壮
佐藤泰治
金瀬胖

特別賞

平山謙写真集『北信濃飯山の四季』

（評）豪雪と過疎、高齢化を抱えながら、生まれた里を守り続ける人々の姿を、10年余の歳月をかけて記録した。労働とともにある農の日常と野山の自然描写が美しい。（英）

写真集「北信濃飯山の四季」を現研特別賞に選出いただきありがとうございました。長野県飯山市に通って約10年になります。山歩きで出会った長野県飯山の民宿「岸田屋」に月に一度、通っています。特定の村や人の元で「専属カメラマン」気取りでした。「写真集発行は地元でないと」と、村人の強い勧めで信濃毎日新聞社らの発行となりました。村での撮影と現研での学習（講評）の繰り返しが写真集に結実したものと感謝申し上げます。（平山謙）

奨励賞

「有機農家のポートレート」

豊島洋（MFW）

（評）厳しい自然環境、困難な政治的条件のなかで有機栽培に取り組む人々のポートレート群、その顔と体に刻まれたもの、自らの仕事に確信を持つ人々の姿は美しい。優れたプリントでありドキュメントである。（金瀬）

ナツメヤシ農家　パレスチナ自治区（ヨルダン川西岸地区）

ヨルダン川渓谷は、パレスチナ自治区（西岸地区）の中でも肥沃な土地と言われており、オリーブの他、ナツメヤシ、柑橘、野菜が栽培されています。ナツメヤシは収入源の少ないパレスチナ人の貴重な換金作物となっています。イスラエル軍の妨害をかわしながら農業を続けています。

畜産農家　パキスタン　北西辺境州

パキスタンの北部の山間地は畑作地が少なく、牛やヤギなどの畜産業が盛んです。2005年に発生した大地震で多くの被害を受けましたが、未だに復興の途中です。被災された知人の農家を訪問しました。

奨励賞に選出していただきありがとうございました。私はこれまで有機農業に関わる仕事をしてきました。海外の農家と話をする機会も多く、今回の写真はその時に撮影をしたものです。
日本とは異なり、農は半分で、残りの半分は狩猟というところもあれば、自分の畑に行くのに軍の検問を通らなければならないところもあります。それぞれの事情を背負いながら、ひたすら土に向かう彼らをこれからも撮り続けたいと思います。　（豊島洋）

奨励賞

「ヴィバルディ　冬」

稲垣直子 （総合科）

（評）この曲には「人々は氷で滑らないように慎重に歩いているがやがて春が来る」というソネットが付されているが、雪のなか前かがみになって駅のホームを歩く人の姿は終わりのない舞台のようでいつまでも見ていたくなる素晴らしい写真だ。　（金瀬）

この度は奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。
日常の中の特別な瞬間を捉えたいと思っています。雪が降るプラットフォームで改札に向かう人々の動きが音楽的に感じられ、ヴィヴァルディの冬が脳裏に浮かんできました。その景色の美しさに感動していました。（稲垣直子）

奨励賞

「作者の意図を探りつつおもしろく見るこのアート」

舘山哲（土曜ゼミ）

（評）現代アートの展示空間を巧みに表現したユニークな作品。壁面構成にも工夫がなされ、鑑賞者の〝驚きと、納得と、〟共感と・・・〟が伝わってくる。（英）

「奨励賞」選出ありがとうございます。作品は、これまでの私の作品とは異なり、遊び心を優先したもので、展示も講師の助言もあってアート的な構成となりました。これは、土ゼミ修了展としては異質な作品でしたので、受賞は思いもよりませんでした。　受賞をきっかけに今回作品の様な写真表現活動を継続するかは別ですが、遊び心は、又どこかで顔を出すかも知れません。（舘山哲）

奨励賞　「高輪築堤」

清水康子　（入江ゼミ）

（評）錦絵に描かれ幻の高輪築堤の発見を感動をもって記録しています。明治期の溢れるエネルギーを鉄道遺稿に見出した感性と行動力は素晴らしいものです。（尾辻）

この度は奨励賞を頂き、光栄に存じます。
入江ゼミではまったくの新人で、入江先生やゼミの先輩の方々にはご迷惑ばかりおかけしておりますが、いつも辛抱強く、そして温かくご指導頂いているおかげで受賞できたと思っております。
これからも精進してまいりますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。　（清水康子）

大原漁港に生きる

宮原咸太郎（オンラインワークショップ）

大原の海は漁礁に恵まれ、伊勢海老、タコの産地として名をなしている。大原の街中とそこに生きる人々を表す時漁業に携わる人は欠くことができない。近年観光化や商業化が進み、遊漁船や大原の朝市が活発である。他方、小型船で沿岸のエビ網で男衆に負けずに活発に生きる女衆や老人の姿がある。海に生きる人々の姿を街の風景として描きたいとおもう。

戦争に向き合う

谷口 亙（オンラインワークショップ）

ロシアのウクライナ侵攻以降、世界は緊張につつまれました。
日本では、それに乗じ「核兵器を国内に！」 と言い出した。
「戦争」は全てを狂わせると思います。
日々・個々の　戦争への向き合い方がたいせつと思います。

しもきたダイアリー　2022 年 4 月　夕暮れの下北沢

生田一美　（尾辻ゼミ）

初夏の渡良瀬　　髙松安子　（尾辻ゼミ）

旧谷中村（渡良瀬遊水地）は緑一色だった。
２か月前までは真茶色で頭の上でカラカラ音をたてていたのに…。
今は若いヨシの葉が初夏の日差しを浴びて光り輝いていた。冬の期間中は「干し上げ」という水を抜く作業が施行されているが今は流路一杯に水が流れている。谷中墓地に向かう途中、小さな刈込みをみつけた。水は流れるというより溜まっているといった感じで初めてみたヨシの根元と水の色。歩みを進めると谷中湖は満水で湖面はきらきらと輝き湖面いっぱいに広げた枝は日差しを独り占めしているようだった。どこから飛んできたのかワタスゲが波に揺れている。渡良瀬はいつ訪れても季節折々の顔をみせてくれる。また来たくなる所が渡良瀬だ。

印旛沼の漁師の　嘆き、そして、苦笑い

長谷川啓一（尾辻ゼミ）

印旛沼の漁獲量は、1981 年：約 1000 t（トン）、→　2020 年：約 50 t と、激減。印旛沼漁協に所属の猟師は、2020 年：約 200 人、実際に漁をしているのは、約 50 人。しかも、高齢者、兼業漁師が多い。正確な統計が得られず、推計値。

漁師は、それぞれが、沼のどこかの入江、接続小河川などに拠点・船着き場を持っている。写真の漁師は、北部印旛沼に流れ込む小河川、江川の河口付近に船着き場を設けて、「スジエビ」などの、小魚種の漁を専門にやっている様子。2003 年に、国内各地でコイヘルペスウイルスを起因とする、様々な影響で、消費者が淡水産魚から離れ、印旛沼漁業もその影響を受けた。その後印旛沼は、水質汚染は歯止めが効かず、外来魚の繁殖影響などがあり、漁獲量の回復は、ままならない。（写真は、2018 年取材）

３月 11 日　新橋

４月２日　神田

街の呼吸　　渡辺壮 （金瀬ゼミ）

都市の在り様について考えています。都市の解体と再構築から取り残され、時間が止まったかのような一街区に、飲食店街がある。迷路のような細い路地の中へ、吸い込まれるように踏み入れて行く。そこには、人の香、臭いが漂い、丸や四角の煙突の様な金属管が、あらゆる方向へ雑多に突き出している。街が風化しないで維持できるように呼吸しているのだ。

上「影の家々」
下「町外れの光景」

最初、ストレートフォトグラフィーの手法で写真を学んでいました。
ある日、ルイス・ボルツらニュー・トポグラフィックスの写真家の作品に触れ、興味を持ちました。
この二つの写真はその影響が表れています。
今後、発展させたり、新たな要素を加えたりしながら「独自の視点」を持った写真が撮れるよう、勉強していきたいです。

佐藤泰治 （金瀬ゼミ 2022 年度新入生）

消えた田圃　　船橋駅北側　2021 年 12 月　金瀬胖

食料危機、環境機器の言説は賑やかですが、眼の前で消えてゆく田圃。これが人のただいまの風景、私らの文明の姿。ならば、写真は迅速に捨てられる文明の瓦礫でいいはずはない、と考えています。

金瀬ゼミのお誘い　ゼミの四つの柱

写真を撮ること　それは当然ですが何を撮るかを考えることです　大切なのはそれを考えること
自分は見てきたか、何を撮るものなのかを考えること
頼まれた写真はどんな写真もしっかり撮ること、それを残すこと

写真を見ること　大量に撮る、見る時代です。この時代の土台にあるのは写真です
だから何を撮ったか、何が撮られているのかを時間をかけて見ること

写真を見せること　データ、ネガまだ原－像です。ディスプレイは個々、時々に変容します。
見せるにはプリントが一番です。決して軽視してはいけません。そこに写真の全てがあるのですから。
見せて、と言われたらいつでも見せられるようにしておくこと

写真を編むこと　選択・編集のない写真もまだ原－像です。その山を見るのがとても好きですが。
規模の大小があるにせよ、写真展をいつでも開催できるように準備しておくこと
この写真は本であることに意味がある、この人の、この写真でなければいけないという本。
本その形、タテ、横、大きさ、分量、その価値。それは内容が決めることです